

発行にあたって

広島無政府主義研究会代表 吉岡文春

全国各地で自由を求め、コミュニティの建設を夢見て日夜奮闘しつつある同志、友人のみなさんに、我が研究会は熱い連帯の気持ちを込めてここに一冊のパンフを贈る。

このパンフは、1987年3月8日に行われた「農青決起55周年記念研究会」における三原容子さんの講演をまとめたものに、当日も出席していただいた農青メンバーであった和佐田芳雄氏のインタビュを加えたものである。広島国労会館で開催されたこの研究会は、わずか10名たらずの参加者であったが、主催者として、我が研究会は、農青再評価―復権の第一歩として画期的な集会であったと自負している。

そもそも、この研究会は、1986年のスペイン革命50周年のアベル・バスの講演会（東京、大阪、広島、福岡で開催）にあわせて、広島では、「スベ革―農青50年」集会として開催することを追求していたものであったが、農青を正面から研究した講師を当時の我々が見つけ出すことができなかったためにのびのびになっていたものであった。

戦争と革命の1930年代にスペインで決起したアナキストの闘いを記念し、教訓を汲み尽くして現代の革命に生かそうとするならば、この国で同時代にスベ革と類似した闘いをもって決起した農青の歴史に無関心であることは許されないというのが我が研究会の基本的な考え方だったのである。

ともかくも、こうして我々はスベ革50年、農青55年の記念集会を86―87年を通して、当初の構想とは多少

とも異なった形式を取りながらも、ようやく貫徹したのであった。

我が研究会がはじめて農青を「知った」のは、1985年10月27日の研究会であった。講師の和佐田氏が語る農青の闘いの歴史は、我々には衝撃的であった。戦前の天皇制軍国主義の嵐の中で唯一最後まで闘い抜いたのは、やはりボルシェビキだったと思い込んでいた我々は、眼からウロコがとれるような想いをもって受けとめたことを、今もきのうのこのように想い出すのである。

「日本にアナキズム革命への闘いがあつた！諸運動・諸党派が圧殺させられ、圧倒的多数のアナキストが転向し、ボルシェビキさえも中央委の保存のために地下へ逃亡、潜行していた、まさにその時に、公然と大胆に革命的地理区画（コミュニティ）の樹立を呼びかけた闘いがあつた。アナキストの闘いに対するたった一つの治安維持法適用事件―350名の逮捕者を出すという全国的浸透性、そして何よりも国家権力をして『スペインと同じことを彼らはやろうとしている』といわしめた革命性をもつ運動があつた。」ことに我々は驚き、かつ鼓舞されたのである。

我が研究会は今後も「農青」に関する研究を精力的に続けたいと考えている。間もなく黒色戦線社からは「農村青年社資料」が発行されるという。我々にとつても大変嬉しいニュースである。そのうち、アジア・中南米の農村地帯で、「農民に訴う」が革命運動の手引きとして使われる日がくるかもしれない。いずれにしても、アナキストを自称する人々が、戦前戦後を貫いて、アナ・ボルを通じても唯一といえるであろう、この天皇制国家権力との真正面からの革命戦（農青運動）から多大の教訓をつかみ取り、現代の革命運動の糧とされんことを声を大にして訴えたい。

農村青年社決起55周年記念研究集会基調講演

農村青年社と現代

三原 容子

紹介していただいた三原です。今、司会の方が、農村青年社を中心に研究していると紹介して下さいましたが、農村青年社を中心にしているわけではなく、日本のアナキズムの歴史を研究する中に、農村青年社も入っているという事です。農村青年社資料を全部読んでいるというわけではありませんから農村青年社について語るのとはおこがましいのです。あらかじめお断わりしておきます。ただ、アナキズムの歴史の諸運動の中で、私は農村青年社を高く評価しています。

なお、私の話には「農村青年社と現代」というテーマが与えられています。農村青年社に限らず、アナキズム運動史全体についても、単に古い歴史を好事家的に知りたいというのではなくて、現代の問題として研究しているつもりです。

私の辿ってきた道

さて、私は農村青年社を高く評価しますが、それについては、私の自分史と深い関りがあると思いますので、まず、そこから話していきたいと思います。

私は全共闘より後の世代で、直接、アナキズムの運動に触れて、そういう勉強をしようと思ったわけではありません。まず私の中学時代は、公害が次々と明るみに出て強い衝撃を受けたり、成績で人格まで判断され進路指導で輪切りにされることに憤りを感じたり、金に困らない皇室の生活を疑問視したりという時代でした。高校時代は、家が経済的に苦しかったこともあって、自分の出身階層のために何かしなければならぬという使命感のようなものを持つようになりました。また、教師やら、県教委やら、権威・権力に対する

猛烈な反感を抱いていました。

こうして何かしら問題意識は持っていました。進学後大学に溢れていたマルクス主義的な思想には、最初からついて行けませんでした。いろんな話を聞き、読みましたが、どうにもそれらには賛同できなかったのです。今にして思えば、公害の問題、核兵器の問題、資源の問題、女の解放の問題、組織の在り方の問題などで引っかけたのではないかと思います。

進学して私が一番ショックを受けたのは、被差別部落との出会いでした。京都へ来て初めてその存在を知ったのです。それから被差別部落に限らず、民族や人種や性の差別に関する本を読んだり、集会に出て行ったりするようになりました。差別のない社会を、というのは私の原点のようなものです。

こうして私の問題意識の中で徐々に二つの方向性ははっきりしていきました。ひとつは、人間と人間の間には無支配・無差別であるべきだという事です。

アナキズムという言葉を知ったのは、そんな頃です。アナキズムという言葉を知るまでは、自分の胸の中で、問題がモヤモヤしていました。そして、私は変わり者なのだろうか、とも考えていました。ある時『中国女性史』（小野和子著、平凡社）を読んでいて、登場するアナキストの女性たちの感性が、私にピッタリだということを見ました。ああ、この「アナキズム」という言葉を手掛かりにして行けば、私と同じような考え方の人が見つかるんだなと思いました。それが私の「アナキズム」との出会いでした。

以後、「アナキズム」が書名に入っている本、広告で知った黒色戦線社のパンフなどをむさぼり読むようになったというわけです。「アナキズム」というのは随分範囲の広い言葉なのだという事もだ

んだんわかって行きました。無支配・無差別の社会のあり方を「アナキズム」を手掛かりに考えていこうということになりました。

もうひとつの方向性というのは、人間と自然の関係は「農」を基本にするべきではないかという事です。「農本主義」と一応カッコつきで使いますが、これは歴史的な用語としては垢にまみれた言葉で、たいていは右翼のイメージを持たれるので、私はちよつと違つて、使い方で使っていると言いたいからです。公害や核の問題、エントロピーの問題などを考えた結果、私は「農」を基本にする社会の在り方という意味での「農本主義」が望ましいのではないかと考えるようになりました。でも従来の「農家」「農村」には、女として素直に認めがたい、社会的に女性を抑圧する性格が含まれている様に思いました。これは、先程の、差別・支配のない社会を目指す方向性とは矛盾するわけです。

実は私は、大学院に入るまでは、ある程度、決まったコースを進もうと思っていました。大学院を出て、大学の教員になって経済的に独立するというコースを。その為に、オーソドックスな「研究」をまじめに男以上にしないでほしいと思ひ込んでいました。次第に、本音の自分のやりたい事、つまりアナキズムや農本主義に対する関心と、優等生でお決まりのコースに進もうとする自分との間にギャップがあり、自分の体が引き裂かれるような思いをするようになりしました。今思えば、女の経済的自立にこだわって過ぎていた、「研究」と運動を関連させるためのいろいろな方法だつてあったのですが、ともかく結果的に世間の認めるような道をご破算にして、自分の生きるべきだと思う道、つまり運動や「アナキズム」の研究を取りました。今では、いざとなれば食っていくくらいはなんとかなるわ、と開き直って自分を生きています。

先ほど言った二つの同時並行していた関心事、アナキズムと農本主義が一本になったのは、石川三四郎のおかげです。偶然に読んだ網沢満昭という人の文章の中で「農本のアナキズム」という言葉を見つけ、そこで初めて、石川三四郎という人を知りました。（『農本主義と近代』雁思社）

明治時代の平民社の石川三四郎は教科書に出ていたかもしれませんが、しかし、「農本のアナキズム」という、二つのものが統合された形で私の前に登場したのです（1980年1月）。私の生き方・人間の行くべき道を探る上で、これこそ導きの星ではないか、これを絶対にやってみよう、と、休学していた大学院に戻って図書館を利用して石川三四郎について勉強を始めました。石川三四郎と石川三四郎に関わる周囲のことを手探りで調べましたが、彼はスパッと書いてくれないし、彼の思想を抑握するのは難しい作業でした。

そうしている内に彼の周囲のこと、つまりアナキズムのことが余りにも研究されていない事に気がきました。石川をもっと知りたいと思ったら、石川の周辺のことかわからないと難しいのです。そして又、石川の問題とは別に、アナキズムという思想が現実の運動の中でどう闘われてきたのか、実践されてきたのか、を知りたいと思うようになりました。以来、アナキズムの運動史、思想史の資料をあさるようになりました。

まず、アナキズムの農村運動に関して調べました。加藤一夫、犬田卯、鎌田研一ら、農本主義とアナキズムの境界線あたりにいる者たちについても調べました（1983〜84年頃）。そのうちの自連派の農村運動については「戦前アナキズム運動の農村運動論——その1 自連派——」（『京都大学教育学部紀要』第31号、1985年3月）に書きました。石川三四郎はサンジカリズムの重要性

を強調しますが、それでは現実に関われた労働運動はどうだったかについて知る必要があり、次に労働運動史の勉強をしました（「1930年代のアナキズム労働運動——合同と無政府共産党——」（上）（下））、『労働史研究』第3号、第4号所収、1986年、87年）。その後は石川三四郎の天皇制の問題、共同体の問題、人間の自由の問題などについて勉強しています。

また並行して、運動史研究の実習というわけではありませんが、生活者、女として市民運動に関わって、運動というものの難しさ、楽しさなどを肌で味わってきました。

こうした中で農村青年社にも出会うことが出来ました。私はずっと一貫して、①人間と人間の関係、②人間と自然の関係、という二つの問題意識を持ってきました。②の問題があるからこそ、農村・農業にも農村青年社にも強い関心を持って来たと思います。では本題に入って、農村青年社について、見ていきたいと思います。

農 青 運 動 の あ ら ま し

1931年という年は、9月に満州事変が起こった年です。その数ヶ月前に農村青年社は決起しました。満州事変後もまだ日本国内の国民生活は戦争へ、戦争へとという雰囲気ではありませんが、政治状況は次第に戦争の泥沼へ落ち込んで行つた、そういう時代です。

当時のアナキズム運動の状況を少しお話ししますと、主に自連（全国労働組合自由連合会）についての話になりますが、理論の面でアナキズム運動に大きな影響力をもっていたのは八太舟三と、岩佐太郎でした。彼らはクロボトキンの影響を深く受けています。革命というものについては非常に楽観的で、大雑把に考えていまし

農村青年社年表

資料名「雑誌・パンフ」「論文」（筆者）

月・日

1931年

2・6 『農民に訴ふ』（宮崎晃）

2・12と2・20頃 宮崎、星野、鈴木、八木、会合→農村青年社成立

2月より 地方行脚

3・20 『農村青年』第1巻第1号、3月号

4月 『農民時報』第2号（第6号）（1932・1）『農民に訴ふ』転載

4・25 『農村青年』第1巻第2号、4月号

5・10 『パンと自由』第1号（『黒旗』付録）自分のことは自分で???

6・1 『大門時報』第33号 『農民に訴ふ』転載

6・20 『農民の友』第1巻第1号、6月号

7・1 『大門時報』第34号 『農民に訴ふ』転載

7・8 『如何に為すべきか』（鈴木靖之）

7・20 『黒旗』廢刊に就ての声明書（旧黒色戦線社）

8・1? 『大門時報』第35号 『農民に訴ふ』転載……発禁

8・1 『最近運動の組織並びに形態についての提議』自主行動の強調（宮崎晃）

（8月）『協同組合はいか悪いか』（宮崎晃）

8・15 いわゆる信州暴動計画の決定（8・23 松本会合）

8・29 『パンと自由』第1巻第1号

8月 『革命新聞』第1号……資料未見

9・1 『農民の友』第1巻第2号、9月号

9月 『革命新聞』第2号……資料未見

10月より1932年4月まで 密発活動

10 『茨城県愛郷塾の再批判——日本村治派同盟を排撃せよ——』（鈴木靖之）

11 『全国情報報告』……資料未見（宮崎晃）

12 『吾国に於ける革命の完結に就て』（宮崎晃）

12・23 『農村青年』第1巻第3号、12月号

た。つまり革命が起こりさえすればとにかく無政府の状態が出来るんだと考えていたように思えます。だから細かい事柄、革命の時の防衛の問題や自給自足コミュニケーションの問題などについては、ほとんど論じられませんでした。1930年、31年頃の無政府主義関係の雑誌を見ると、どの団体も抽象的なアナキズムの宣揚といった内容で運動報告が少なく、一番おもしろくない時期です。大雑把な論のみで実際運動をさぼっていたのがこの頃のアナキズム運動の特色と言つてよいのではないかと思います。

一方当時農村は大恐慌で、それに比較し、都市はそれほどではないという時代で、農村と都市の経済的落差が大きかったわけです。農村は理論どころではなく、食う問題で切羽詰まっていた、そんな状況にありました。

その年の2月に宮崎晃さんの「農民に訴ふ」というパンフレットが出ました。このパンフは農村青年社にとって非常に重要な意味を持っています。その重要な点というのは、農民は支配・搾取されていると叫ぶだけの従来のアナキズムのパンフと違って、農民自身による自給自足・共産・相互扶助を三天眼目とする経済的直捷行動を、これなら出来ると思わせるような形で具体的に示したことだと思います。農村の苦しい生活の中で、現状を打開する道を具体的に提示したので、当時のアナキズムの状況の中では画期的なことだと思います。自給自足の眼目ひとつを例にとっても、漠然としたものではなく、塩が不足すれば隣の村から借りてこればいい、というふうに具体的、現実的な内容を提起していました。

この少し前に同じく農村青年社に加わる鈴木靖之が「農村青年に訴ふ」というパンフを出していますが、それは、従来のアナキズム

1932年

1・1 『無政府主義研究』第1巻第1号

1・1 『黒色戦線』第2巻第1号、1月号、

1月 宮崎晃ら逮捕

批判(1・10) 『現下の問題』(八木秋子)

『迷霧主義者に与える書』

『不純分子の徹底的掃蕩を期す』

『自由連合新聞』第66号

批判(1・20) 『行きて行く道』(李ネストル)

『僕はかう考へる』(木下茂)

『黒旗』創刊号

2・1 『黒色農民新聞』(『農民の友』改題)

2・1 『農村青年』第4号、2月号

批判(2・10) 『吾等が老人岩佐太郎氏を囲んで物を語る座談会』

『自由連合新聞』第67号

2 『総選挙に際して青年諸君に訴ふ』(八木秋子)……資料未見

3 『自主行動の強調』(李ネストル)『黒旗』……資料未見

批判(3・10) 『僕はかう考へる』追記(木下茂)『黒旗』3月号

3・13 『農村青年』第5号、3月号

批判(3・14) 『大阪の同志』「再び悪傾向に言ふ」

『自由連合新聞』第68号

4・18 星野、八木らも逮捕

4・20 『農村青年』第6号、5月号

4・20 『信州自由連合』第1巻第1号

批判(5・1) 『所謂自主分散派を僕は斯く見る』『民衆の解放』

6・20 『信州自由連合』第1巻第2号

9 『無政府主義研究』第1巻第2号……資料未見

9・27 『農村青年』第6号『農村青年』の解散に就いて(鈴木靖之)

批判(10・10) 『清算して再出発 農青態度声明』『自由連合新聞』

11・18 南沢、佐久全農事件で検束

流の抽象的な内容で、宮崎晃の書いたパンフに比べれば、人を立ち上らせる力はずっと弱い。

このパンフ「農民に訴ふ」によって多くの青年が立ち上がったわけだ。「農民に訴ふ」は農村青年社のバイブルと言っても過言ではないと思います。宮崎晃、星野準二、鈴木靖之、八木秋子らが会合を開いて農村青年社をつくり、さっそく全国各地に情宣に行きます。「農民に訴ふ」の文章は、『富農時報』『大門時報』のような村の公共的な新聞にも転載されて村人に読まれました。各地方へ出かける他に、『農村青年』などの機関誌も発行されました。長野では、一村丸ごと農村青年社が影響力をもつ村も出来ました。

夏になると運動組織や取り組みについての細かい事柄が述べられた発行物が出ました。鈴木靖之の「如何に為すべきか」と宮崎晃の「最近運動の組織並びに形態についての一提案——自主行動の強調」です。前者は「民衆との結合」「全村運動への準備」「日常的諸問題への対応」「全村運動の動向」などの章を立てて、具体的な農村運動のやり方を論じています。

後者はアナキズム運動陣営内で問題になったパンフです。「自主行動について」「分散について」「自主分散の強調」「結成主義の誤謬、黒連、自連の解散」という項目がもうけられていましたが、どこが問題になったかという点、「結成主義の誤謬、黒連、自連の解散」のところは、当時アナキズム運動のおもな団体といえは全国労働組合自由連合会(自連)、黒色青年連盟(黒連)だったので、自連が自主活動の分散に徹したならば、最早、集中組織は無用の長物である。「黒連、自連、その他の同形の一切の組織結成の解散を提唱する」と書いたからです。

8月15日には、いわゆる信州暴動計画の決定がされました。同

1933年

批判(1・10)「小児病者を排撃しろ」『自由連合新聞』

3 平松出所

5・23 「無政府主義の話1」(鈴木靖之)『汎濫』1-1

6・15 「無政府主義の話2」(鈴木靖之)『汎濫』1-2

7・10 「全農会議派の批判とアナキストの動向」

(南沢製鉄松)『自由連合新聞』第82号

9・7 「何を為すべきか(1933年版)」(鈴木靖之)

1934年

3 南沢・鷹野原、信州アナキスト連盟結成

6・5 「地方通信 信州より」(編集部)『自由連合新聞』第91号

9 星野、八木、望月、和佐田、出所

10・22 十月事件(長野、特別大演習前の一斉検挙)

1935年

8・26 宮崎出所

12・25より 農村青年社メンバー検挙

1936年

6 「日本無政府主義関係検挙者身上調査書」(刑事局)

8 「『農村青年社』資料」(刑事局思案部)

1937年

1・11 農村青年社事件記事解説

3 「農村問答」(刑事局思案部)、(鈴木靖之手記)

4・12 農村青年社東京側一審判決(長野地裁)

4・14 農村青年社長野側一審判決(長野地裁)……資料未見

10・26 農村青年社第二審判決(東京控訴院)

12から1938・2まで『続農村問答』1、2、3

(刑事局思案部)(鈴木靖之手記)

1938年

12・9 草村欽治・船木上・大日方盛豊第一審判決

志も多く、地勢上からも長野県が最も革命の可能性が高い所と判断されたのです。蜂起の際には軍事施設などの爆破・重要都市の焼却が必要であることも合意されました。ここから運動の進行は急に駆け足になり、まもなく「吾国に於ける革命の完行について」と「全国情勢報告」が出ます。後者の資料は見付かっていませんが、どこで革命的情勢が進んでいるという、各地の報告を発表したもののようです。これも自連、黒連から猛烈な批判を受けました。「自分達が秘密にしていたことを公に暴露したものだ、農村青年社はスパイか!」というわけです。また前者は革命の時期が今すぐそこに迫っているという書き方をしています。つまり、ある地方で、これほもちろん長野を指していますが、そこで、自給自足のコミュニケーションが出来ようとしているという内容です。そのあたりの文章を見てみますと「……全国三府四十三県それに散在する七百の同志は多くは過去十年間の無政府主義運動の多難なりし歴史過程を踏んで来た所の人々である。ことに軌近数県数地方に於ける動向は確実に革命を今日の問題として把握せる直接革命運動の様態が看取せられる。」「今日に於いての我々の責務は、民衆への力の確示である。即ち、テロルを重点とする運動の諸発展である。それは全く時宜に適するものである。」と切迫感が感じられます。信州の計画が実現間近であると考えていたことが窺えます。

この頃の自連派の人達による農村青年社批判を見てみましょう。「一つの運動が真に力を得る為に一番大きな妨げは方言言語である。」(32、1八太)「無責任極まる戦線情勢の報告と煽動文書を発行し、身、自身は洞ヶ峠に安閑と立ち籠もり煽動の結果をフカンするスパイ的存在。」(32、1)「自己に対する自惚れと排他的傾向に急であつて、慎重な吟味検討とそれの影響についての深遠な顧慮

はいささかも発見することが出来なかつた。ただむやみに黒連自連の連頭体を集中主義の権化であるかの如く誹ぼうし、……」(32、1木下)「実行力のない者ほど、文書に口に勇敢なコトバを吐くものだ。」(32、2)「農青社の諸君の農村解剖など、多分に、僕は見解を同じくしているが、実践行動に対する意向中には賛成したい点がある。……諸君達の闘志が旺盛の余り、……」(木下)「……地方情勢、××の完行とか云ふインチキ物を出版したこと、その他政府認可の農青紙上に麗々しく内容を官報的に公表したこと自身が運動の無知……」(32、3)などなど、手厳しい。大阪あたりでは受け取め方が若干異なっていたようですが、東京のアナキストの多くは批判的でした。

信州暴動計画以後、「社会テロル」の為に必要な資金を調達するため、農村青年社の人達は窃盗活動を始めます。資金源がそれしかなかったのです。その為に数ヶ月後には東京のメンバーのほとんどが獄に捕われていきました。

機関紙発行など社会との接点になっていた鈴木靖之は信州暴動計画の際にも加わらず、後で報告を聞いただけでしたが、窃盗活動にも加えられていませんでした。そこで、主要な在京メンバーの内で彼だけが捕まらずに残り、同志が獄中に繋がれている間も、彼は次々と文章を書き、全国に農村青年社の主張を訴え続けていきました。同志逮捕後の鈴木靖之の行動に対して宮崎晃は批判的ですが、後で触れましょう。

1932年9月、鈴木靖之らは解散声明を出しました。これは獄中の同志が知らない内に、勝手に出したものです。その中で、彼は自連や黒連の批判に対し、「一応反省すべき点はありませんか」と言い「一部分の主張によって……甚だしく飛躍的な運動の指針に

突入したことは、各地の同志からの忠告によって遂にこれを廃刊するの止むなきに至った程異状なものであった」と農村青年社の運動が過激にすぎたと批判しています。今まで農村青年社がやったことを全面的に悪かったと書いているのです。

しかし、ここで鈴木靖之が転向して、農村青年社の活動を止めたかというところではありません。解散声明を出した翌年の9月にも、彼はパンフ『何を為すべきか』の中で「一地理区画の意識的確立」とか「各地区の直接連絡」という表現を用い、従来の農村青年社の主張をほとんどそのまま展開しています。

鈴木靖之は解散声明で農村青年社運動を止めたというのではなく、もともと信州暴動計画に批判的だった彼が、そうした行為については明確に否定を表明し、それ以外の農村青年社の理論的な財産はそっくりそのまま受けついただということになると思います。

1935年の暮れに、アナキストが全国的に検挙されてしまいましたが、その時に捕まった鈴木靖之は、獄中で、資料もなしに、ものすごい量の手記を書きました。この人は、とにかく筆が早く記憶力の良い人だったようですが、それらの文章には、農村青年社の理論を整然と体系化したものが含まれています。「自由コミュニティの三原則」として「自治民権(自立自営・全村自治・万人平等々々)」「自治民産(自治自営・全村補充・村民共同々々)」「自治民道(自立自営・各村伝統・全村共同々々)」と表現したり、アナキストの行動の種々相を分類して論じたりしています。

農村青年社の運動をしていたときには、とくに鈴木靖之以外の主要メンバーが逮捕されるまでは、そのような理路整然とした形の理論は存在しなかったわけですから、鈴木靖之が書いたものを「農村青年社資料」に含めることは、おおいに問題です。

ところが現在農村青年社の資料として残っているものの多くは、この鈴木靖之が獄中で、つまり、実際の活動から数年後に書いた手記によるものです。長野地裁の検事局の「農村青年社の全貌」は、「農村青年社組織者にしてその理論構成を担当した鈴木靖之は」と捉えて、鈴木の手記をそっくりそのまま農村青年社の理論説明に使っています。司法省刑事局発行の『思想研究資料』特輯第32号「農村青年社資料」も、ページの大半を鈴木靖之の手記にあてています。そして、鈴木靖之は宮崎晃と共に2大首領として重い刑罰を受けました。暴動計画に関与しなかった鈴木靖之は、もともとっと軽い刑罰で済ませられたのではないかと思います、あれだけ大量の手記を書いたのですから、責任の半分は鈴木靖之にあるのではないかと、という気がします。

東京の同志が窃盗罪で獄に繋がれている間も、東京以外の地方の農村青年社関係者は、鈴木靖之らの解散声明には無関係に、自分の運動を着々と行なっていました。たとえば、年表の1933年のところを見ると、南沢袈裟松、この人は、長野の人ですが、「全農会議派の批判とアナキストの動向」という文章を『自由連合新聞』に書いていますが、そこには、農村青年社の運動が継続されていることが読み取れます。また「信州アナキスト連盟」というのを作ろうとして、地道な活動を続けていました。

長野では上伊那、北佐久、諏訪、小県が、農村青年社運動の盛んな地方でしたが、南沢さんの北佐久では全農全国会議派が盛んだったのです。全農全国会議派というのは共産党系の農民運動団体です。南沢さんは、そうした日共の中で、アナキストのフラクション活動をしていったというわけで、全国的にも珍しい例だと思います。当時は既に、アナキズム独自の農民運動団体はなかったのですから、そ

の他の農民組合の組織の中で、アナキズムの運動を展開していたのです。活動家として土地に根を張っていたと言えますか、青年団などとも深く関わっていて、要注意人物としてマークされていました。共産党系の中で、よくアナキズム運動をしていたと感心します。やはり、アナキズムの原理とか、理論の先行ではなく、生活者の必要とか生き方から発する運動だったから続けられたのではないかと私は思います。

1934年10月、「十月事件」が起きました。群馬の特別大演習に天皇が来るというので、その前に権力が山を越えた長野の左翼活動家まで一斉に検挙しました。その時、南沢さん達も検挙されました。そのあたりで、農村青年社の運動は終息したと言っているのではないかと思います。

しかし、東京の同志が既に獄中にあっても、その他の人々は自分達の生活の場で、ずっと運動を続けていたということが重要な点だと思います。これは、運動組織の性格によるところが大きいと思います。農村青年社に限らずアナキズムというのはそもそもそういう傾向があると思いますが、特に農村青年社では顕著です。つまり、一点拠点を作ってそこが潰れたら全部だめになるというような運動ではなく、各人がそれぞれの場で自発的に、状況に応じて闘いを進めることができるという形です。

農村青年社の全員が検挙されたのが、1935年です。1937年には各地で、判決を受け、服役していきました。宮崎晃や、八木秋子らは、窃盗事件等の刑期を終えて出てきたところで、再び、数年前の農村青年社の件でやられたという形になりました。

農村青年社の一斉検挙は、日本無政府共産党事件が発端となつてなされました。日本中のアナキスト関係者数百人が検挙され、その

人達の身上調査書が複製されています（『日本無政府共産党関係検挙者身上調査書（社会問題資料叢書）』東洋文化社）。この検挙された人の中には、ただアナキズムの新聞を読んでいただけの人も含まれています。

日本無政府共産党は、自連の機関紙『自由連合新聞』の編集者達によって1933年12月に結成された秘密結社で、1935年頃には、アナキズム労働運動でも強い影響力をもっていました。その機構や、革命構想には、アナキズムよりレーニンらの影響の方が大きいように思えます。それまでの八太舟三や岩佐作太郎のアナキズム運動論では、労働組合・農民組合などの大衆運動は非常に軽視されていましたが、それに対する反省から日本無政府共産党は大衆運動を重視し、それを指導するアナキストの団体として党を作ったのです。資金活動にからんでいるいろいろな事件が起こり、日本無政府共産党事件、さらには全国のアナキスト総検挙へと至ったわけです。この事件がなぜ農村青年社事件にまで繋がったのか、詳しいことは私にはわかりません。

（このあとで和佐田氏に伺ったところによると、東京で日本無政府共産党事件をあげたのを見た長野の検事が、こちらでも一つでかい事件をあげようという功名心から数年前の信州暴動計画などを持ち出して「事件」としたものであるらしい。長野地裁の予審判事は既に窃盗罪など確定判決が出ている事件であるから免訴にしようとしたが、検事は確定判決を受けていない分について内乱予備罪で起訴することが可能と考えて、特別抗告したという。結局治安維持法で起訴されたのである。）

先ほども触れましたように、多くのアナキストが農村青年社を「独善的だ」とか、「飛躍的だ」と言って批判しました。それは農

村青年社が当時のアナキズム運動を痛烈に批判したことが第一の原因ですが、その時農村青年社が自連や黒連に対して使った言葉「結成主義」の最たる者が日本無政府共産党だと言えます。組織論、方法論において党と農村青年社はほとんど対照的な性格を示しています。両者共に1935年の大検挙で壊滅しました。

その日本無政府共産党のメンバーのひとり伊藤悦太郎が長野へ行き、南沢さんらと何度も話をしています。党が出来たからメンバーに入ってくれと誘い、南沢さんらはそれを承諾したそうです。理論面を主に担当する東京と違い、地方で実際に運動をしている者にとっては組織論や方法論の細かいことは余り知られず重視もされなかったということかもしれませんが、よく考えてみれば、農村青年社と日本無政府共産党に重複して加わるというのは不思議な気がします。

農村青年社の意義

まず歴史的に言って、アナキズム運動が大衆運動を失ってしまった時に、具体的に現実的な革命構想を示した功績は強調しすぎることはないと思います。しかもその運動方法が、国家単位ではなく一村・一地方単位で、「自主分散」といういかにもアナキズム的なやり方であったし、そのために東京の運動がとだえても他の地方で継続出来たということがありました。また、自給自足・共産・相互扶助という生活の場のレベルでの直接行動として提示されていたことも、重要でしょう。大衆運動を失った状況を打開しようとする日本無政府共産党の生き方と異なり、農村青年社は、一般的にアナキズムと言われる運動原理に即して、具体的実践的な取組を行なっ

たと言えます。

この点は農村青年社が革命運動の場を、農村という生産と生活を共にする場に求めたことに由来するように思われます。多くのアナキズムの農村運動論は、農村青年社ほどに明確ではないけれど、こうした傾向を示しています。農村青年社はそれを実際にやってみようとしたわけです。

初めに申しましたように、私はこれからの方向を考える上で、人間と人間の関係のあり方の問題と、人間と自然の関係のあり方の問題との二つの方面を合わせ考えていきたいと思っています。主に人間と人間の関係を論じるアナキズムの中で、農村青年社が農村を運動の場としたことは、「農」を基本にした人間と自然の関係をも考え合わせる上で非常に示唆に富んでいると思います。今日「アナキズム」という言葉を用いる人は極々少数ですが、「エコロジー」という言葉はかなり一般的になっているように思います。エコロジー運動と言われているものには、人間の自然に対する態度だけではなくて、人間と人間の関係、つまり社会関係に関する主張も重要な位置を占め、それが非常に「アナキズム」と近いところがあるように思います。農村青年社がエコロジー運動のさがけだった、といった言い過ぎでしょうか。農村青年社を知のことをきっかけに今日のエコロジー運動に対しても関心を持っていただきたいと思います。

しかし、私がちょっと水をさしておきたいのは、農村青年社も、それ以外のアナキズム農村運動論者も、今日の一部のエコロジストも、現に存在するムラ・共同体について、手ばなしの賛美をする傾向があるということに対してです。農村青年社は革命運動における各個人の自主活動を非常に重んじていますが、生活の面でということになると、個性・個人の問題がややういような気がします。共同

体というのは、一面では共同体構成員ひとりひとりより共同体秩序自体が優先すると言うか、個人の自由を抑圧する面があるわけです。そのことも考慮にいった上で、共同体のあるべき姿を求めるということならともかく、そうでない場合には、私が女であるからそういうことに敏感にならざるを得ないわけですが、イエとかムラ志向にはどうしてもちゅうちょしてしまいます。

現在農村青年社に関する資料や研究書がほとんどないため、鈴木靖之の過大評価などを含めて、農村青年社について不正確な伝わり方や不当な評価が起こっているように思います。いずれ農村青年社に関する詳しい資料が刊行されますから、その時には研究する人がたくさんでてくることと期待しています。

私自身これからも、人間と人間の関係、社会について、アナキズムという言葉を手掛かりにしながら、実際の運動にかかわりながら、考えて行きたいと思っています。当時の活動家の方が出席されている中で私のような者が話をするというのは、せん越なことと感じながら、考えていることを話させていただきました。どうもありがとうございました。